

としょぶらり

米子高専図書館情報センター報

ISSN 1344-5634

第 78 号

平成17年1月20日発行
米子工業高等専門学校
図書館情報センター



コンクール入賞者一同

平成16年（第31回）校内読書・エッセイコンクール優秀作品発表

〈読書感想文の部〉

最優秀賞	建築学科5年	長妻 夕起	「セロ弾きのゴーシュ」を読んで ～最後に気付いたこと～
優 秀 賞	物質工学科1年	内田 明宏	「星の王子さま」を読んで
佳 作	電気工学科2年	高橋 裕也	「人間失格」を読んで
//	機械工学科5年	北野 雄大	物語の奥にあるもの～「注文の多い料理店」～
//	物質工学科1年	森山実加子	「一つの命に生かされて」
//	電気工学科2年	武良 匠	「吾輩は猫である」を読んで
//	機械工学科2年	雲藤 自然	「罪と罰」

〈エッセイの部〉

最優秀賞	物質工学科1年	田原 由樹	ありがたいこと
優 秀 賞	電気工学科2年	高橋 裕也	人と道具について
//	電子制御工学科3年	八幡和士宏	日頃の疑問－私の占い観－
佳 作	機械工学科2年	生田 恵里	ずっと疑問に思っていること
//	建築学科1年	山本 麻実	正義とは何か？
//	電子制御工学科3年	西嶋 沙織	自由と勝手はどうちがうのか？
//	電子制御工学科1年	金谷 拓実	戦争と平和を考える
//	電気工学科2年	杉本 寛樹	正義とは何か？

校内読書・エッセイコンクール優秀作品発表

読書感想文の部

最優秀賞

「セロ弾きのゴーシュ」を読んで ～最後に気付いたこと～

建築学科5年 長妻 夕起

この作品は中学生の時に読んだ気がする。「気がする」だけで、本当は教科書をパラパラとめくった時にこの作品があったというだけかも知れない。しかし、何か私にこの作品を読むべきだと言っていた。

読んでいくと内容にひかれていく自分がいた。私は一気に読み終えた。

ゴーシュの人柄、登場してくる動物がころころと変わっていくおもしろさ、そして最後にゴーシュが気付くこと。…

ゴーシュはセロが上手く弾けなかった。音楽会がせまり、楽長に怒られ続け、涙をこぼしながらも一人残って練習した。むしゃくしゃもするだろう。その時はまだ、何をしにやって来たのかかわからないような猫をどなりつけたりもしている。しかし次第にやってくる動物達とうちとけ、ゴーシュは動物達を待ち構えるようになる。

動物達の目的が分かった時、ゴーシュが思ったこと。それはきっと、楽団では仲間の足を引張っている自分のセロでもあてにされているといううれしさや、セロを弾くことに対する自信ではないだろうか。「鼠と話すのもなかなかつかれるぞ。」というゴーシュの言葉はそんな思いの照れ隠しにも感じられる。そしてそのうれしさや自信が、音楽会での大成功につながったのではないだろうか。

音楽が好きだった宮沢賢治。この作品は、異常なまでに鋭い音感覚を持ち、多忙な中でもセロやオルガンの練習に不断の精進を続けた彼の姿。レコードによる西洋音楽の鑑賞に熱中し、農村青年を集めて管弦楽団を作ることを願っていた彼の姿。そんな彼自身を風刺したような、自画像ともとれる作品だ。病床においても推敲を加えている作品であるから、彼のこの作品に対する思いも一人だったに違いない。

また、愚直真剣な少年楽人の精進の勝利を示す作品であるため、中学の教科書に載ったり、人形劇、

映画などになり、彼の伝えたいことが私達にも分かりやすいと感じさせるのではないか。

この話を読み終えた時、ふと私は自分自身を振り返っていた。

学生生活最後となる今年、就職試験のために部活動を辞めるか、辞めないか悩んでいた。これまで中国大会優勝を目標としてきたが、その目標は果たされていなかった。「諦め時かな」とも思った。しかし諦められなかった。だから私は下手なりに精一杯練習を頑張ることにした。同時に就職試験の勉強は「やらなくては」という焦りになっていた。

最後の中国大会でも優勝することはできなかったが、得たものはたくさんある。これらは負けたからこそ、得られたものかもしれない。焦りや不安から、練習ではきつく後輩にあたってしまった。試合では負けるたびよく泣いた。よく泣き、よく笑った部活動。

就職も決まらない今、ゴーシュのように大成功だったかと言うと、自分でもよく分からない。

ただ、最後の試合が終わった時、呆然と立ちつくす私の隣には私より先に泣いていた後輩の姿があった。それに気付いた時、私は救われたような気がした。そしてとてもうれしく思った。彼女がこの試合を私と同じような気持ちで挑んでくれたんだと。また、「彼女に悪いことをしたな」とも思った。

彼女とかっこうを同じものにしてしまったのは失礼だが、この作品の「あゝくわくこう。あのときはすまなかったなあ。おれは怒ったんぢゃなかったんだ。」という最後の文がどうしても頭から離れずにいた。全く同じことを私が思っていたからだろう。

おそらくゴーシュはどの動物達にも謝りたかったはずだ。三毛猫やかっこうには、乱暴なことを言って悪かった。いじわるをして悪かった…。そしてお礼も言いたかったはずだ。子狸にはセロのおかしいところを教えてくれてありがとう。野鼠の親子にはセロを弾くことに対する自信を持たせてくれてありがとう。全ての動物達に、自分のセロに、「怒る」「喜ぶ」といった感情を教えてくれてありがとう。自分が必死になってセロを弾くように、夜明けまで練習に付き合ってくれてありがとう。

いつものように自分のうちへ帰り、水をはがぶがぶ飲んだ後、ゴーシュが気付いた動物達への思いは、ゴーシュの優しさ、つまり作者宮沢賢治の優しさや人間味のこもった思いやりそのものだったのではないだろうか。そのような作品にひかれ、自分自身を振り返ることにもなったこの一時。私は忘れることなく再びこの作品を読むのだろう。

優秀賞

「星の王子さま」を読んで

物質工学科1年 内田 明宏

「星の王子さま? いったいどんな話なのだろうか。」
そう思い、何気なく手に取った一冊の本。僕はその後に待ち受けている驚愕の内容をつゆとも知らず、最初の1ページを開きました。

まず、僕を待っていたのは、「ウワバミ。」突如現れたウワバミの絵は、僕に強い印象を与えました。ページを捲ると、次には帽子の絵……。いや、実際それは「ゾウ」を飲み込んだ「ウワバミ」だったのです。そして僕は、作者の罠にまんまとはまってしまったことに気が付きました。固定観念にとらわれた大人同様、外見だけに騙されてしまったのです。そこで初めて、この小説は「大人」の考え方への風刺を示しているのではないかと、と思いました。そこから先は、目を注ぐように真剣にこの作品を読み始めました。

外見の美しさを持った花。その内面の美しさに気付くことなく星を出発した王子は、旅の途中様々な人に出会います。王さま、うぬぼれ男、呑み助、実業屋……。彼らは現代に生きる大人、人間が持つばかりしさをそっくりそのまま表していました。どんなことも自分の手の内にあるように威張り、他人に感心されることに喜びを感じ、酒を飲み、金に目が眩み独占欲を持つ。そして自身によって真実を知ろうとはせず、他人の情報に従い、物事を数字に表して、人生を押し量ろうとする。

そんな大人達の中で唯一、点燈夫だけが他の人とは違っていました。彼だけが、自己を優先していなかったのです。「生きていく上で本当に大切なこと、それは自分ではなく他のために何かをすることだ」と王子は言いました。確かに僕も、他人のために何かをできるということは、すばらしいと思います。しかし、それをできる人が、62億の人間のうちにどれほどいるのか、僕には分かりません。けれども、僕は誰しもそれを行える可能性を秘めていると思います。誰もが心にきれいな物を持っているのです。ただ、つまらない大人世界に慣れ、その心を忘れていただけだということを、この作品が教えてくれました。

「かんじんなことは、目に見えない。」
キツネと出会うことで、世界で一つしかない何か、という物があることを知った王子。数多くある同じ物の中で、特定の物に時間を費やし、それを世界に

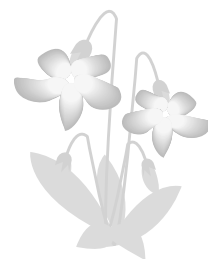
一つしかない特別なものにすることは、一般的に忘れられがちなことかも知れません。また、自分が相手にとっても特別になるのです。しかし、うわべだけの「言葉」に騙されて、「内面の真実」、つまり「自分を想う相手の気持ち」に気付かない。この気持ちは、人として大切なことだと思います。

あきんどとの話では時間の大切さ、本当の心のゆとりを大人は忘れていたと思いました。忙しい生活の中で、時間を節約することにばかり集中して、自分が何を探していて、何を求めているのか見失っている人が多く、そして、固定観念のない子供ほど、自分の求めている物がよく分かっているのです。きっと王子の言うように、探している物はどこにでもあって、それは目ではなく心で探さないと見つからない。人が求める本当の「美しさ」や「偉大さ」は目には見えないのだと思います。王子の大切な「花」を宿す星の美しさの様に、大切な何かを秘めた人の美しさ。それをうわべに騙されず、心の目で見極めて欲しい。そういった願いが、この作品に込められている様な気がします。

人によって星の見方は違う。自分の大切な何かがあるからこそ、その星はひととき美しく輝く。その大切な何か、を見つける心の目を持ち続けることができれば、どんなに心の美しい人間になれるのでしょうか。僕はこの作品を読んで、忘れかけていたとても大切なことを、改めて思い出しました。そして、大人になることの悲しさと、大人になっても、昔のままの、純真で素直な心の大切さ、美しさを、10年も20年も、これから先ずっと忘れないでいたいと思いました。

空から地上を見下ろし続けた作者は、きっと永遠に変わることのない「本当の美しさ」を見つけたのでしょ。そして、戦争などの続く腐敗した世の中を見て、一人でも多くの大人に、その美しさに気付いて欲しい。そう考えたのかもしれませんが。

最後に、王子は、心だけではなく体も星に帰ることができました。それは彼がどちらにも飾ることのない純粹さを持っていたからだと思います。これから先大人になり、多忙な毎日にあくせくするようになって、時々この話を思い出し、夜空の星を眺めることができたらいいな、と思います。



佳作

「人間失格」を読んで

電気工学科2年 高橋 裕也

何気なくこの本を手にとってみた。題名と表紙を見て借りることにした。僕はちょっとしたホラーやミステリーが好きだからだ。家に帰ってからさっそく読んでみると、ギョッとした。確かにホラーだった。ミステリーだった。でも、恐怖とか摩訶不思議などという言葉では言い表せられない。深海のずっと奥のような、真夜中の得体の知れない気配のような暗く深いものが文の初めから最後まで、ずっと後をつけてきていた。それは、しかし、読んでいく内にその存在を見えなくしていった。決して消えたのではない。徐々にその姿を文の中に融けこまして擬態したのだ。読み手は著者の技巧に思考を惑わされて、狂わされて、おかしいことを正しいと受け入れてしまうようになる。そうすると、読み終わってみて、自分の中の思考が著者の思考に傾いているのだと気付く。でも、そこが著者の巧い所で、読み手は物語の主人公から直接語りかけられているような感じを覚えて1ページたりとも飛ばして読めなくなってくる。もう、人に秘密の話を打ち明けられているのと一緒に状況だ。相手が自分を信頼して話してくれるのだから、こちらとしても、それなりの態度で聞いてやらなければならないし、何より秘密というものが一体どういうものなのか興味が湧く。

それに、自分だけが相手の良き理解者であるという何だか得体の知れない確証と自信が何処からともなくやって来て、余計に使命感と親近感を煽るのだ。

その話の流れはこうだった。まず、自分の生い立ちから始まり、人間に対する不信感の芽生え、それを必死で振り払うようにして考えた末のお道化者(お調子者と思ってもらえばいいです)への転化。それでも募る不信感の恐怖と葛藤する日々。自分の本心を心の奥にひた隠して道化師を演じ続け、とうとう一体何が本心だったのかも分からなくなり、ふと知り合った女性と心中をはかる。しかし、自分だけ生き残ってしまい、罪悪感と胸に風穴が開いてしまったような喪失感に打ちひしがれる。その後、何度か更正しようとするが、一度狂ってしまった運命という歯車は直ることを知らず、それどころか無情にも鈍い軋みを上げながら崩壊へ加速していく。最後は、薬と酒と女に溺れ、27歳という若さで廃人のようになってしまった。後には、あとがきがあるが、この不運な男の証言はここで終わっている。

「いまの自分には、幸福も不幸もありません。ただ、一さいはすぎて行きます」という言葉を残して。

この男がその後、どう生きたのかは知らないが、一つだけ確かなのは、これは「太宰治」という作者の遺書、あるいは自分史だったということだ。たくさん著書の中には、この本に載せられていた事件に類するものが少なからず使われていたし、何よりこの本の内容が、著者の一生の内に起こった出来事と数多く重なっていたからだ。それに、著者はこの本を書き上げてすぐ、自殺して亡くなっている。

「偶然」という言葉で片付ければそれまでだが、僕は運命じみたものを感じずにはいられない。根拠という根拠は持ち合わせていないが、この本を読む限りは、読み手を喜ばせようとか悲しませようとかいった配慮がほぼないに等しく、それよりも自分自身のために自分の生き様というものを余すところなく表現しておこうという息込みが、ひしひしと伝わってきた。そういう意味で、著者にとって集大成の作品だったのだと思う。

今という一瞬を必死に生きた人々の中の一人を、この本に垣間見た気がした。

この本は、僕にいい意味でも悪い意味でも仰ぎ見るくらいの影響を与えた。与えてくれた「太宰治」は遠い昔になくなったが、せめて著書の中だけでも御会いしたい。

物語の奥にあるもの
～「注文の多い料理店」～

機械工学科5年 北野 雄大

本質を見ようとしないうちに真実は見えない。この物語を、長い月日を経た後に、改めて読み返してみてもこう思った。昔読んだ時には単に、「ミイラとりがミイラになる物語」として認識していたが、これは単なる「不思議な物語」ではない。人間の醜い部分を表現した物語ではなからうか。

山奥で歩いている二人の紳士。狩りを殺しのゲームと勘違いしているようだ。山が深く連れてきた犬が泡を吐いて死んでも、いくら損害だと悲しそうにではなく、くやしそうに言いあう。戻りに山鳥を買って帰るのだから「羽」ではなく「円」を用いている。確かに買うときは金を使う。金は今となっては最も便利な道具かもしれない。今どき、金で買えない物などない、と映画の悪役は言う。あくまで悪役ではあるが、言っていることはあながち間違っているわけでもない。実際に買えるのだ。金で買えるものならば。

技術は進歩し、便利な世の中になった。物騒な世

の中でも、設備を買い、人を雇えば安全だって買える。昔に比べれば医療は格段に進歩し、金銭面に不自由がなければ難しい手術も受けられる。それで命が助かったのであれば実質のところ、命を買ったことになるとも言える。言えないにしても、手術を受けさせた者が直接できたのは金を払うことくらいだったはずである。このような世の中だから、このような紳士と呼べない紳士がいたとしても、現代からしてみれば何の違和感も持たない人もいるかも知れない。だが、よくよく考えてもらいたい。同じ生き物として人間が死んだとして、損害を金で計算する者が果たしているであろうか。もしいるとするならば、まったくもって身勝手なことこの上ない。相手側のことを一切考えず、ただ自分の利益だけを求める迷惑な人間だ。それがこの二人の主人公である。自分たちの犬を、道具としてしか見ていない。むしろ、金で買えると彼らは思っているわけであるから、犬の命よりも金の方が尊いとも思っているのであろう。こんな人物とは関わりたくないものだ。

さて、物語は進んで二人はあやうく山猫に騙されて食べられそうになる。どうしてここまでうまく騙されてしまうかが、この物語の最大のポイントである。普通ならばあの様に簡単にひっかかるはずがないのだ。それでも主人公達は罠にかかる。原因は主人公の心境である。主人公達は腹が減っていた。二人とも太っていたし、その腹の減り様は半端ではなかったかもしれない。しかし注目すべきは彼らの性格だ。二人とも自分の利益しか、自分の目的のことしか考えない傾向にある。自分たちの都合のいいように解釈していく様を見れば、一目瞭然ではなからうか。彼らの自己中心的な考え方が自らの終幕を招きかける、という事態を引きおこしたのである。この様な出来事は、何も物語だけではとどまらない。後から考えてみると、「あの時はこうしておけばよかった」と後悔することが自分にも多々ある。後々になって冷静になると、見えていなかった部分が理解できるようになり、的確な解決策が見いだせるのである。裏を返せば、その時に無駄な思考が働いているからこそ真実が見いだせない、ということである。大切なのは、自分にとって何が大切なのかを考えるのではなく、物事の本質を見抜こうとする気持ちである。各地で争いが起こっている現代に必要なものはシェルターではなく、戦争をなくそうとする一人一人の心持ちではないだろうか。

この物語で主人公たちは、自分たちが見捨てた、価値を金でしか考えていなかった犬たちに助けられた。おそらくこの主人公たちに、自然というものの本質を気づかせたかったのであろう。死なせてしまっただけでは考える余地もない。当の本人たちは一生気

づくことができずに終わってしまったが、大切なのはそこだったのではないだろうか。様々な情報が行き交う現代で本質を見ようとするのが、真実を見つげ出す近道なのかも知れない。本質を見きわめていけば、真実はおのずと見えてくるのだ。

「一つの命に生かされて」

物質工学科1年 森山実加子

この物語の主人公信夫は人生のどんときでも、まっすぐな心で自分の進むべき道を考え、しっかり歩んでいました。この人は私達の理想の人物ではないだろうかと思いました。作者が憧れて作り出した人物といっても間違いではないと思います。ところが、全くの空想の人物ではなく、実在した人物をモデルにしたそうです。本当にこのような人が実在していたのだろうか少し疑問に思いましたが、それよりも信夫のような人がいたことに強く感動し、同じ人間として誇りに思いました。

この物語を読むまでは、私は毎日をただなんとなく過ごし、先のことなどほとんど考えずに生きてきました。しかし、この本を読んだことで、これまで一度も考えたことのなかった人間の生きている意味や本当の愛とは何かについて強く考えさせられた気がしました。

幼い頃信夫は、武士の家に生まれた者として、町人と区別して祖母に育てられ、とても差別意識の強い子供でした。ところが、信夫の両親は決して町人の生まれの子を差別しませんでした。信夫が町人の子供と自分を差別したときには、いつもは静かな父が殴ることもありました。信夫が立派になり、周りの人達みんなが魅力を感じるような人になっていったのは、誰にも同じように接していた父や母の言動が大きく影響を与えていたからだと思います。信夫にとって両親の生き方、考え方が人間としての生き方のお手本だったのだと思いました。

生涯、信夫は多くの人と出会いました。小説家の中村春雨、伝道師伊木一馬。この人達は信夫にこれまでなかった宗教への熱い信仰心を植えつけました。その頃、キリスト教は人々から嫌がられていて、信夫もこの二人に会うまでは邪教だと考えていました。けれど、その二人をはじめ、たくさんの人との出会いで信夫は変わっていきました。一人一人の生き方を見て自分と照らし合わせ、ついに、他にはないような一筋に神を信じ、生涯絶えることのないような思いが生まれ、それが強くなりました。その熱い信仰は、自分さえ幸せならよいというものではなく、周りの人全てが幸せになってほしいというもの

でした。だから、周りの人だれにも宗教の意味を教え、生きる希望をなくした人にもあたたかく接して、立ち直らせていったのです。

私の心に一番深く残り、感動させられたのは信夫の死です。信夫の手はハンドブレーキから離れ、その体は線路目がけて飛び降りていきました。この場面で私の体は震え、これまでにないような強い衝撃を受けました。この目で信夫の死を見たように、頭の中が真っ白になりました。この感動と衝撃は脳裏に焼きついていて、いつまでも消えそうにありません。その反面、自分の一番大切な命、失ったら二度と戻せない命までを、他人のために投げ出す必要があったのかなと思いました。信夫は人のためにも、もっと長生きしてほしいという気持ちが強くなりました。きっと信夫の周りの人々全てがそう願ったことでしょう。また、信夫も線路の上に飛び降りる直前に、大切な人達が待っていることを思い出したことでしょう。それでも、そのことを頭の中から振り払って、皆を助けることを決断した信夫の辛さとか勇気は、私には想像もつきません。けれど信夫が生きている時に言っていた「いつ命を召されても喜んで死んでいきたい」という言葉を思うと、信夫の死は信夫自身にとっても私から見ても希望通りで、短くても誰よりもすばらしい人生だったと思います。そして、本当に私と同じ人間のしたことなのだろうか、人間はこんなに強くなれるのかと不思議に思うとともに、自分の弱さを改めて感じたような気がしました。

信夫の死は、「犠牲の死」。正しくそれでした。今の時代、犠牲と聞くと「犠牲になんてなりたくない。」と否定し、言葉そのものが失われている気がしました。しかし、信夫は決して犠牲などとは思っていないだろうと思います。信夫自身とすれば犠牲という状態で、真実の愛を貫いたのだと思います。何も求めない愛の実行。この愛の実行は決して簡単ではありませんが、「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一にして在らん、もし死なば、多くの実を結ぶべし。(新約聖書ヨハネ伝)」の言葉通り、信夫の一つの命が多くの人々に新しい命をふきこみました。信夫の死によって救われた人々の生き方は、これでよいのだろうかと考えさせられましたが、これからも私の心の奥には永遠に信夫が生き続けます。生きるうえで、信夫のことを思い出しどのように生きるべきかの支えにし、「一粒の麦…」の言葉のように、多くの人を生かし、導けるような道を歩めたらと思いました。

「我輩は猫である」を読んで

電気工学科2年 武良 匠

日本人には主体性がないとよく言われる。そのこと自体、僕自身も思い続けてきたことだ。「僕的に〇〇って感じ？」や「多分私は〇〇かも？」と、いうように、はっきりしないことがかなり多い。

「吾輩は猫である」を読んで、僕はこれと現代社会との違いを比較せずにはいられない。

この小説は冒頭の一文、あるいはそれ以前にタイトルの時点で「吾輩は猫である」と言っている。「僕的に猫って感じ？」や「多分私は猫かも？」というあいまいな言い方ではなく、「我輩」は、ズバリ「猫である」と断言している。

このことについて僕は当時の時代背景が関係しているのではないかと考えている。当時、明治という時代。欧米列強に必死に追いつこうと、国民が丸丸となっていた時代。しかし、日本と列強諸国との間には埋めることのできない大きな溝があったのだと思う。それが、英語に代表される彼らの基礎である「I (アイ)」である。「I」つまり「私」である。英文学を学び、留学経験のある夏目漱石にはこのことがよくわかっていたのだと思う。彼らに追いつくには、この日本でも「I」の確立が必要だと強く思い、そのことが「吾輩は猫である」となったのではないかと思う。

しかし、この冒頭の一文に続く次の文章には、「名前はまだ無い」と書かれている。もし、名前が存在していたとしたら、それは彼ら列強と代わりのない主体の確立が達成されるのだが、著者は名前を「無い」と書いた。これは一体なぜだろうか。考えてみると、欧米に追いつくには、「I」が必要であることはわかっている。「I」は必要不可欠なものである。しかし、その一方で著者は全面的に欧米と同化することに躊躇、不安を持っていたのかも知れない。本当にそれが正しい道なのかどうか、そんな思いが「名前はまだ無い」の一文に込められているのではないかと僕は考える。

この作品の最後に、猫は溺死してしまう。このことから、結局著者は自分の満足するような答えを見つけることができなかつたのだと思う。そして、今現在、「僕的に〇〇って感じ？」という、はっきりとしないこの現代社会において、僕たちはまだ彼の残した宿題に対して、確固とした答えを出せていないのだと思う。いつの日にか彼が答えられなかつたこの問題の答えを見つけ、彼を超えていきたいと思う。

「罪と罰」

機械工学科2年 雲藤 自然

著者はドストエフスキー。フルネームはフョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー。19世紀を代表するロシアの作家である。

この作品「罪と罰」では、鋭敏な頭脳を持つ貧しい大学生ラスコーニコフが、一つの微細な罪悪は百の善行により償うことができるという考えのもとに、醜悪な高利貸しの老婆を殺害し、その財産を奪い、有効に使おうと企てたが、偶然その現場に帰ってきたその妹まで殺してしまう。予期しなかった第二の殺人が彼の心に不安と罪の意識を与え、彼は悩み苦しみがき、奇妙なめぐり合わせのもと出会った一人の娼婦ソーニャにすべてを告白してしまう。そして彼は自分の罪の意識にケリをつけるために警察に自首しに向かう。というのが大体のあらすじです。

この作品を通し、僕が考えたことは罪とは何かです。確かに人を殺すことは罪でしょう。これは間違いありません。しかし、歴史上の英雄、偉人と呼ばれる人々の手は多くの場合、血にまみれています。

例えば、戦争という異常な場で自分が将官だったとします。その時敵を多く殺した場合、与えられるのは、「英雄」という名です。しかし、指揮や判断のミス等で味方を殺され敗れた場合、浴びることになるのは、死んだ兵たちの家族なり友人なりからの「殺人者」という名です。敵を殺しても味方を殺しても、ベクトルが違っただけで、結局自国か他国かに戦災孤児なりなんなりを作ってしまう。これは、罪なのでしょうか。

僕の結論はこうです。法の下での罪と自分で感じる罪の二種あるというのが結論です。先程の戦争中という特殊状況化における罪というものは、あくまで自分が意識しない限り、それは罪にはならないのではないかということです。ここでいう罪とは、自分で悪いと思いついて「償いたい」と考えること、つまり「罰」を受けたいと思う心のことです。英雄と呼ばれる人達は正義のためならば罪を犯す。そして、正義を持って罪を償う。ということでしょう。

あくまで罪とか罰という概念は目に見えないもので、心を縛るものは、結局は自分自身だということを考えさせられた作品でした。

エッセイの部

最優秀賞

ありがたいこと

物質工学科1年 田原 由樹

私はある人に会うため病院へむかった。その人は私より二歳下の男の子で、昨年私と同じ時を院内学級で過ごした子だった。その頃彼は、建物の内に長くいたせいで肌は透き通るほど白く、髪は薬の副作用で抜け落ちていた。今の彼は肌の色艶といい髪の色といい、まるで別人の様になっていた。一見、元気そうな彼なのだが、この度4泊5日の検査入院をしなければならないのだ。彼を勇気付けるべく見舞いに行ったというのに、本人は悠々自適にベッドの上で楽しそうにしているのだ。ベッドを隔て入院している男の子に、手品を見せてもらって和気藹々と入院生活を送っているとのことだった。その子は私にも、挨拶がわりに一つの赤いボールが二つになるという奇術を披露してくれた。

私は彼に、さり気なく尋ねた。

「何年生。」

彼はにっこり答えた。

「中卒。浪人中。」

私はとっさに笑って、その場を取り繕って、切り抜けた。

「男同士の仲を裂いちゃいけないから、おさらばします。」

自分がそこにいることが堪え難くなり、席を外したのだ。

帰り車内で声を殺して泣いた。過去の苦い思い出が、何から何まで脳裏にフラッシュバックされた。その衝撃荷重に堪えられなかったのだ。

そう、私は去年受験にもかかわらず入院を強いられた。今だから言えるが元気な中学生を無性に妬ましく思っていた。自分は車椅子でしか動けない。外にも出られないという状況だった。自分だけ置いてきぼりを食っているような、そんな孤独感がわくのだった。私にとっての院内学級は気休めでしかなかった。受験できるかどうかさえ分からない状態の中、満たされぬ思いでいっぱいだった。どんなに先生が熱心でも。この時期の空白の日々は、後になっても自分だけ人より遅れているという脅迫観念を植えつけた。

今こうして一年前と全く違う自分がある。自分の

足で歩み、自然の息吹を感じ、憧れだった学校にも通い、人前で泣き笑える。どんなに切望しても、もう手に入らないと思っていた。

人間は、大切なものは失って初めて気づき、手に入れるといつの間にか忘れてしまうようだ。自分の幸せを彼と会い改めて実感した。また、私はこれからの高校生活を一層色濃くしてくれるきっかけとなったと思う。

彼は、私との出会いをどう感じているのだろうか。励みか妬みか、それとも通りすがりの変な女の子でしかないのだろうか。私は、人と人の出会いは一つとして無意味なものはないと今考えている。今まで出会った人たちにありがとう。いっぱいいっぱいありがとうを心の底から言いたい。

みんなに伝えたいこと。人は一人では生きていけない。生きていくだけでも誰かの支えとなれること。だから、人との出会いを拒まず、いつも心をオープンにし、たくさんの人の力をもらい、また力を与えよう。

世界で一番幸せな女の子より。

優秀賞

日頃の疑問—私の占い観—

建築学科3年 八幡和士宏

近頃占いが流行っている。朝のニュース番組ではほとんどの局が毎日行っているし、その他の番組でも、使い勝手の良い占いをちょっとした隙間に入れて活用している。TVに限らず、女性誌、ゲーム誌、文芸誌等の各種雑誌やインターネット上のサイト等、様々な媒体に登場しては、可もなく不可もなく一定の地位を確保し続けている。しかし、ここでふと思うのだ。「どうしてこんなにも占いが、数多くの人々の心を掴んで離さないのか」と。そのことについて思案する前に、そもそも占いとはどんなものなのか、考えてみようと思う。

まず占いの種類についてだが、タロット占いに血液型占い、姓名判断に十二星座占いといったポピュラーなものもあれば、皿を落とした際の割れ方を占ったり、コーヒーの飲み跡で占ったりといったあまり知られていないものまで、数多く存在している。それどころか現在もその数を増やしているというのだ。

ここまで数が多いと混乱しそうだが、考えてみれば占いで知りたいことはたった一つしかない。何か

と言えば、そのものずばり「未来」である。日々生きていく中で、あの時にこうなることが分かっていたならば、と思うことはたびたびあるし、未来が分かっているならば、どうにかして変えることはできないだろうかと考えるのが人情だ。この気持ちは不変なものであり、だからこそ遙か昔から様々な形を取りつつも行われて来たのである。

しかし、長年行われて来たということは、裏を返せばそれなりに当たっていたということになるのではないだろうか。そこで、占いの有効性、信憑性についても考えてみることにした。

・・・と、勇んでみたものの、「常識」的に考えてみれば、未来は無限にあるのである。私達は未来という暗闇を、必死に手探りで迷走しているのであり、その先に何が待っているのか、鬼が出るのか蛇が出るのかは分からないのだ。それを水晶玉を覗き込んだり、数十枚のカードの並びを見たり、生年月日や名前を見たりするだけで知ることができる道理はないのである。当たるわけがないのだ。

うむ、これでは古来より占いが行われ続けて、現在でも良く当たる占い・占い師が続出している理由が根底から覆ってしまうではないか。これではいけない。

そんな時、以前新聞に載っていた姓名判断師の話思い出した。その方によれば、「私達が姓名判断をして依頼人の方を幸せにしているわけではなく、依頼人の方が自ら幸せになるよう努力しているからこそ幸せになるのです。」ということなのだそう。これを例に上げて説明すると、仕事で悩んでいる会社員が相談に来る→占い師が姓名判断を行い、〇〇という名前にすると仕事運が上がるという→それを依頼人が信じ、名前を変える→これで仕事運が上がると喜び、気持ちが前向きになる→以前よりもやる気が出て、仕事がかどる→それが評価されて、待遇が良くなる→あの占い師の言っていたことは本当だったとしみじみ思う、ということになるのだろう。

これを見る限り占いというものは、いかに相手を納得させるかが重要なのかも知れない。たとえ占い師が適当なことを言ったところで—実際はまさにその通りなのだが—、相手がその言葉を信じてしまえば、相手が自らその内容を達成したって、やはり占い師の手柄になるのである。

こう考えてみると、占いに傾倒している人々は、未来という暗闇を照らしてくれる灯りが欲しいのかも知れない。不安定な今の世の中では、確固としたものを見つけることは難しい。だからこそ、少しでも自分の未来を良い方向に導くために、一見すると信憑性のない占いを信じるのだろう。たとえ自分の納得の行かない結果を得たところで、様々な媒体で、

様々な占いをやっているわけなのだから、どれかを当たってみて自分の都合に合ったような結果を拾い上げれば良いのだ。

嘘も方便とはよく言ったものではあるが、占いが全て嘘っぱちだろうと、それで誰かが努力する気持ちになり、結果的に幸福になってくれるのならば万々歳である。私のように占いに懐疑的な人でも、こういうことならば信じる気になってくれるかも知れない。

・・・まあ、余りにも馬鹿馬鹿しい結果には、苦笑を禁じ得ないのでは——あるのだが。

人と道具について

電気工学科2年 高橋 裕也

蚊が腕に止まっていた。そいつは大分膨らんでいた。反射的に手が動いて潰した。手に付いた血のりと蚊の亡骸なごがらを見ると、すまないことをした、とも思えてくる。しかし、これがハエ叩きなどを使った場合、その感情は希薄になっている。仮に、ハエ叩きの網に捕まった亡骸を、いつまでも眺めていれば違ってくるだろうが、そんなことを誰がするだろうか。

手とハエ叩き。別に手でなくてもいい。自分の体の部分について言えるのは、自分と繋がっているということだ。確かに当たり前のことだが、実はこれが重要なのだ。自分と繋がっているからこそ、周りの環境が自分に与える、暑さや爽快感、痛みなどの全ての影響が、直接自分へと伝わってくる。だから、自分がしたり、されたりしたことを相手にしたらどう感じるのかが予想できる。一番分かりやすい例が喧嘩だ。殴ったら手耐えがあるし、殴られたら痛い。

だが、ハエ叩きを含む全ての「道具」と呼ばれる物を使用した場合、事態は一転する。

例えば、石を投げるとする。石を掴んだ時は石のゴツゴツとした感触や冷たさ、大きさが手を伝わって体に入ってくるが、石が手から離れた瞬間、その意識はプツリと途切れて文字通り「手の届かない場所」へと飛んで行ってしまふ。意識が届かなくなってしまうから、うっかりして人に当たってしまったても、その痛みは自分に伝わってくるはずもない。

伝わってくるのは、せいぜい自分の内側から生まれくる心への痛みだけだ。もしかしたら、その痛みこそが人に残された最後の誇れる物なのかも知れないが。

そして、しかもそれは手に持ったままの道具でも同じ様なことが言えてしまう。先程は意識が届かなくなるとしたが、今度はどの程度まで力を入れてもいいのかという制御ができなくなってしまう。体の

一部分ならば練習で体に覚えさせることによって調整がきくが、手に持った道具にはそれが難しく、気を抜くとどうなるか分からないという恐しさがある。

思うに、人は道具を生み出したが故に戦争をも生み出してしまったのだ。その証拠に、道具を持たない動物達は殺し合いはしない。

テリトリーを、あるいは食べ物などを巡って争いはあるものの、必ず相手が降参するとそれ以上の攻撃はしない。なぜなら、どの程度攻撃したら相手が死ぬのかということ、本能として知っているからだ。野生動物のことをよく人は野蛮さや狂暴さの象徴とするが、一体どちらが狂暴なのか。

道具を使い間接的な攻撃しかしないから、人の痛みを知ることがなく続く戦争、殺人。

よく、刃物を持つと人が変わる人がいるが、あれは無意識の内に日常で我慢している感情が解放され、その意識が刃物に宿ってしまうからではないだろうか。

間接的なことは楽だ。自分に危害が与えられなくても、何らかの目的を果たすことができる。しかし、それは人を弱くし、人と人との関わりを希薄にしてしまうことに他ならない。

だからこそ今、道徳や哲学という精神面での勉強を怠らないことが大切だと思う。自分をよく知り、その上で命を尊べるようになれば、おのずと道具に頼らなくても生きていけるようになるのではないか。

人と動物の間に違いがあるとしたらそこしかなく、そして、それが人である誇りだと思う。

佳作

ずっと疑問に思っていること

機械工学科2年 生田 恵里

私がずっと疑問に思っていること…。それは、どうして人は死ぬかということです。人間に限らず、どうして生きている者に死が訪れるかということです。

私が、この疑問を持ち始めたのは、身近な人の死というものに直面したからです。

高専に入学して初めて迎えた春休み、サークルの先輩が突然、事故で亡くなりました。私も、先輩の葬儀に参列しました。みんな泣いていました。私も泣いていました。今でも、先輩の顔や声、仕草などが頭から離れません。

先輩の葬儀の1ヶ月後、祖父が病気で亡くなりました。その知らせを受け、母の実家に帰った時に見

た祖父の顔は、眠っているようでした。

祖父の顔を見たら、1ヶ月前の先輩の葬儀を思い出しました。先輩の葬儀の時、先輩の顔は見られなかったけど、祖父と同じようにただ眠っているだけのような先輩の顔を想像してしまいました。そしたら、また涙があふれて来て、止まりませんでした。

二人の死は、私にとっても大きな影響を与えました。「どうして、悲しむ人がこんなにたくさんいるのに“死”という残酷なものが存在するのだろうか?」「こんなにもたくさんの人が悲しむのなら、私は死にたくない。永遠に生き続けたい。」と思うようになりました。永遠に生き続けることが不可能だということは分かっているけど、死ぬのがものすごく恐いです。だから、これが私をずっと悩ませています。

私はある日、インターネットをした時によく行くサイトの掲示板に書き込みをしました。「ずっと悩んでいます。…どうして人は死ぬんですか?」と。その私の書き込みに対して、いくつもの返信がありました。その中には、7ヶ月前に友達を亡くした人、3ヶ月前に担任の先生を亡くした人などからの返信もありました。

その返信メッセージには、どれにも似たようなことが書いてありました。

「“死”というものは与えられるものではない。生まれたからには、そこに進んでいると思う。だから、逆に“生”というものを与えられたのだと思う。」

「亡くなった人は、私たちがどう足掻いても還って来ない。だから、あなたがもっと笑うことで、泣くことで、手を合わせることで、先輩が生きてたこと、あなたが生きてることの存在証明になる。」

この言葉が、胸に一番残っています。

掲示板に書き込んでも、私の悩みはほとんど残っています。でも、二人の死で多くのことが分かったし、掲示板に書き込んだことで、今までと少し違った考えができるようになったと思います。

「どうして人は死ぬのか?」という問いの答えは、やっぱり、私自身がこの世を去る時じゃないと分からないと思います。私自身の死が突然訪れるかもしれないので、今の私を少しずつでも育てて行きたいです。

正義とは何か?

建築学科1年 山本 麻実

「正義」という言葉を辞書で調べてみる。

難しい意味では、「社会全体の幸福を保障する秩序を実現し、維持すること」というのがある。社会全体の幸福ということで思いつく言葉は、「平和」

である。そうすると、「世界を平和にする」ということが「正義」なのかなと思う。そう考えると、日本もイラクへ自衛隊を派遣したり、北朝鮮などに支援をしたりと、世界平和のための努力をしていると思う。日本国憲法の三つの柱の一つにも、「平和主義」というのがある。しかし、細かく見ていくと、殺人・窃盗・イジメなどの、明らかに「正義」とは言えないことが日本にも増えてきている。第二次世界大戦という大きな戦争を経験し、ようやく「正義」に気づき、「平和主義」を掲げてきた日本だけれど、最近は悪いニュースも増えてきて残念である。「正義」って一言で言われても、なかなか難しい言葉のような気もするけれど、社会全体でもっと考えていくべきことであると思う。

また、もう一つの意味で、「正義」とは「正しい筋道・人がふみ行ふべき正しい道」というものもある。「正しい道」とは何だろうか。人はどんな人生を生きれば「正しい」と言えるのであろうか。無難な人生を歩む人、自分の好きなことに生涯をかけて打ち込む人など、人にはさまざまな生き方があると思う。でも、私はどんな生き方が「正しい」と言えるのか分からない。ただ一つ言えることは、人間は人に関わらずに生きていくことはできないけれど、公的な場において、他人に迷惑をかけずに生きていくということは大切だということである。「正義感が強い」という人は、自分のことだけでなく、人助けまですることができる人だと思う。人々が幸せになることに喜びを感じることができるという人は、何が「正しい」と言えるのかが分からなくても、自ずと「正しい道」を歩むことができると私は思う。つまり、「正義」を貫くことができるのだと思う。

私達人間の心には、常に「正義」と「悪」が共存していると思う。人が見ていなければ何をやっても良いと考えるのは大間違いで、常に「神様は見ている、自分の心は見ている、自分の心に嘘はつけないのだ」ということを肝に銘じて、誰もが心の悪と戦い、心豊かな社会生活を送っていくことを願っている。

自由と勝手はどうちがうのか?

電子制御工学科3年 西嶋 沙織

自由と勝手。この二つの言葉の意味はとても似ているように思う。違いを聞かれても、すぐ答えられる人はごく少数で、大抵の人は言葉に詰まってしまうだろう。そこで改めて自由と勝手の違いについて、自分なりに考えてみることにした。

まず、「自由」と「勝手」の意味を近くにあった辞典で引いてみた。二つとも意味がいくつかあった

が、「自由」については、「思いのまま。他に束縛されないこと」、「勝手」については「自分に都合が良いこと」が、今考えると、ちょうどいいように思う。意味を調べてみて、やはりこの二つの言葉は似ているようで違うものだと感じた。そして、ここで自分の持っている考えと異なっている部分があることに気が付いた。

自由について。「何にも束縛されず…」という部分が、一般的な「自由」の象徴だと思う。しかし、私は何かに縛られることによって、人は初めて「自由」を手にすることができるのだと、結構前から考えていた。もちろん何かに縛られるといっても、身動きしづらいう程では決してないけれども。人が「自由」を行うためには、その場所が誰もいない無人島でもない限り、少なくとも最低限のルールやマナーを守ることが必要になってくると思う。ただ自由なのだから、自分がどんなことをしても何も問題ない、というわけではなく、人として守るべきことを守りさえすれば、後はどんな行動をしようとも自分も周りも気分良くいられると思う。

勝手について。これはもう、本当に「自分の都合の良いことしかししないこと」だと思う。これこそ何にも束縛されることもなく、自分の思いのままに振るまうことだと思う。しかし、これでは度を超えてしまうと、周りにいる人達に迷惑がかかってしまい、不快にさせてしまう。周りが不快になると結局は自分も不快になってしまう。そのこと自体に気付くことができない人もたまにいるようであるが。

「自由」と「勝手」は非常に錯覚しやすい言葉だと思う。「自由」な行動は、どんなにしても他人に迷惑をかけることはないし、自分自身も楽しめるはずである。「勝手」な行動は他人を不快な気分にさせてしまう。「自由」と「勝手」を取り違えてしまうと、その「自由」と称された「勝手」は行動は、他人に対して「不自由」な思いをさせてしまうと思う。

人に不自由な思いをさせてまで感じる自由は、本当の自由なのだろうか？やはり私には間違っているように感じられる。自分が自由であるためには、周りの人も自由であるべきだと思う。自分だけが都合の良いように振るまってしまうと、誰かに不都合が生じてしまうのは当たり前なこと、考え直さなければいけないと思う。

自由でいるためには規則を守らなければいけない、と言われると不便に思うかもしれないが、守らなければいけないことは、そんなに難しくないとばかりだと思う。

自由と勝手。似ているように思っている、全く違っているように私は思った。やはり、生きるのならば自由に生きたいと思う人は大勢いると思う。自分

にばかりとらわれず、周りの人を気遣えるような余裕を持った自由が欲しいと、私は思った。

戦争と平和を考える

電子制御工学科1年 金谷 拓実

最近、戦争というものがとても身近に感じられるようになってきました。そして、平和は脅かされつつあります。

2年前のアメリカ同時多発テロ以来、アメリカは2度の戦争を行いました。一つ目はアフガニスタン、二つ目はイラクでの戦争です。二つとも、アメリカの攻撃で開戦しました。アメリカは、これを平和のための戦争であると言いました。また、日本もこの戦争を支持しました。

しかし、僕はこの戦争が平和を作るとは思えません。この二つの戦争で、たくさんの尊い命が失われてしまいました。命を奪われた人々は、平和のための犠牲になったということでしょうか。僕は、これは間違っていると思います。平和というものは、多くの犠牲の上に築かれるものではないはずですし、そうあってはいけません。今までの長い歴史の中に、たたえられるべき戦争はありませんし、これからもそうだと思います。

戦争を容認する人々が増えてきた原因の一つには、戦争という言葉の軽さがあります。戦争というのは、人間同士の殺し合いです。戦争という言葉を使うことで現実から目を背けていると思います。戦争とは言わずに殺し合いと言え、なかなか賛同できなくなるのではないのでしょうか。

今回、実際に戦争を行ったアメリカには問題がありますが、それを支持して支援した日本にも大きな問題があると思います。日本は第二次世界大戦後に作られた憲法で、平和主義を宣言して戦争を放棄しています。それにも関わらず、アメリカの戦争を支援しています。日本が実際に戦闘を行わなくても、戦争を行う同盟国を支持し支援をするのでは、戦争をしているのと大差はありません。日本国憲法が作られた当時にはおそらく、二度と戦争に関与せずに世界平和のために努力する、という目的だったのだと思います。それを、現代の人が都合の良い解釈をすることによって、本来の意味を失わせています。第二次世界大戦後に、人々は平和の願いをこめて日本国憲法を作り、日本という国を作ってきたのだと思います。彼等は、僕達にたくさんの素晴らしいものを残してくれました。数十年後、数百年後に誇れるような日本を僕達も築いていくべきでしょう。そのためには、現在山ほどある問題を負の遺産として残

さないようにしなければなりません。戦争が産むものは負の遺産ばかりだと僕は思います。

日本は平和主義国家として、自らが戦争に参加しないことはもちろん、世界平和のために貢献していかなければなりません。自国やその同盟国だけが平和を維持していても、それは見かけだけのもろいものであって、遠くない未来に崩れてしまうでしょう。確かに国や地域ごとに文化や宗教の違いはありますが、平和を望まない国家や人々はまずないと思います。

まだ現在は、世界中に戦争や内戦が残っています。ですが、世界中の人々が平和を望んでいれば、戦争のない平和な世界を作ること、決して不可能ではありません。しかし、アメリカ等の軍事大国が戦争によって作ろうとしている平和は、恐怖からくる幻想の平和です。そんな物が永く続くはずはないでしょう。多少時間がかかってしまっても、戦争をせずにいろいろな問題の一つずつ解決していくべきだと思います。そうすれば、この世界に終わりのない平和を僕達の世代で築けるかもしれません。完全な平和を作り、世界中で協力しなければ、環境問題を始めとする様々な問題を解決することはできないでしょう。

正義とは何か

電気工学科2年 杉本 寛樹

僕にとっての正義は、「偽善」と「自己満足」とできたエゴの塊だと思います。

なぜ僕がこんなことを書くのかというと、まず、かの有名な「正義の味方」にあります。

まったくもって、文字の通り「正義」を以てして、「悪」を打ちのめす我らが「味方」なわけですが、そもそもなぜ「正義」なのに、「味方」などという「付属品」がくっついているのでしょうか。それは「悪」にとっても、自分が正義であり、「悪の組織」にとっても「正義の味方」であるからではないでしょうか。

これで彼らが何のために戦っているのか理解できたでしょう。彼らは自分の「エゴ」を満たすために戦っているのです。かたや「地球を守る」、かたや「地球侵略」といったようにベクトルは真逆に見えますが、どんどんと前へ前へとたどれば、「正義の味方」が守る地球人も全く同じようなことをやっているのです。地球から生物を奪い、殺しては生きる糧とし、生物が生きるべき場所を奪い、人間「のみ」が生きる上で快適な暮らしを目指してきた「地球侵略者(現在進行形)」です。もし、「正義の味方」が「地球の味方」であるのなら、今すぐ人間を根絶やしにする

べきなのでしょう。それをしないから、人間にとってのみの「正義の味方」ということになると考えてもいいわけです。

よって、「正義の味方」は、個人または個団体の「エゴ」を満たす「教祖様」でしかない、無力で下等な「教徒」さんたちが、特定地域での偉大で高名な「教祖様」にすぎり、何か偉大な力で希望か何かをいただくという、客観的に見たらどうしようもないほど「救われない人達」だということです。

今書いたことを見て「客観的に理解」できた方は多いかもしれません。しかし、もし自分が「正義の味方」または「正義の味方のとりまき」だった場合どうでしょうか。多分この考え方自体を「外れた考え方」または「へりくつ」などと言って片づけようとしたり、本当に「客観的にのみ理解」してしまって、自分にもそれが適応するなんて夢にも思わないという場合が多いのではないかと思います。なぜなら、彼らには「正義の味方」が必要だからです。

これは「神」にも適応されると思います。人間は昔から神を信じてきましたが、実際に見た人間はおろか、ろくな定義がされていない神を、なぜ今まで信じ続けてきているのでしょうか。それは、神があらゆる意味で必要だったからではないのでしょうか。政治を円滑に進めるため、神にすがって不安な心を減らすため、上手くゆかなかった時に神のせいにするため、というようにです。

こうやって人間は「正義」「神」にすがって生きていくのでしょうか。それは正義や神が正しい道を持っているからです。それを通れば、他人がどう見ようと、少なくとも自分のエゴの中では、正義であり続けることができるからです。つまり、自己満足です。

人間には、正しい真理など存在しません。だから、「正義」「神」が必要なのでしょう。正しいことがないから、正しいことの象徴のような存在が必要なのでしょう。それは同時に人間の弱さ、いや、醜さの象徴なのではないかと思います。



講評

平成16年度（第31回）校内読書・エッセイコンクールには、総数241作品の応募があり、3回に及ぶ審査の結果、以上の作品が入選しました。文章表現力の低下が叫ばれる中、このような個性的な作品が集まったことは、なかなか興味深いことです。「読書をする」と「文章を書くこと」は、若い高専生にとって、とても大切なことだと思います。コミュニケーション能力の向上については言うまでもなく、「考える力」を育むため、「感じる力」を育むためにも、こうした経験は、将来きっと役に立つはずで、本年度から、図書館情報センターへと組織を移行したため、情報担当の先生方にも審査に加わっていただきました。「情報をいかに伝達するか?」「そのことをどのように受けとめるか?」といったことも、これからのコンクールの課題の一つになっていくのだと思います。(原)

平成16年度
校内読書・エッセイコンクール応募数

	読書感想文の部	エッセイの部
1年	65	52
2年	38	39
3年	2	2
4年	1	0
5年	42	0
計	148	93

第50回（平成16年度）

青少年読書感想文全国コンクール入選作品紹介

優良賞（鳥取県審査）

『舞姫』を読んで

電子制御工学科1年 小坂 泰文

「石炭をば早や積み果てつ。」
『舞姫』の冒頭である。驚いた。いきなり、「石炭」なのだ。舞姫という、天上の高みに遊ぶような麗しいタイトルの後に、唐突に、「石炭」これは、ショックだ。初めて会った女の子、美しく爽やかな感じの女の子が目の前にいたとして、彼女はどんな声をしているのだろうか、鈴の鳴るような軽やかな声なのかなあ、などと期待したら、いきなり、「ゲップ」そんな感じの冒頭なのだ。こともあろうに、こんな言葉から始めてしまうとは、鵠外は何を考えているのだろうか。

石炭といえば、黒だ。闇だ。漆黒、暗黒のイメージだ。黒、闇といえば、暗くて怖くておぞましいもので、嫌な感じでちょっとそばに来て欲しくないような、友達にはしたくないような、そんなイメージが、すぐ思い浮かぶ。しかし、本当にそれだけだろうか。石炭は、暗くておぞましくて嫌な感じなだけなのだろうか。そうあらためて問い直してみると、実は、黒、

闇、といっても石炭のそれは、そういったマイナスのイメージばかりがつきまとっているわけではないかもしれない。

例えば、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に出てくる「石炭袋」は天の川にほとんど空いている穴ではあるが、それは必ずしも恐ろしいものではない。なにしろ、カンパネルラは、そこに本当のさいわいを見出すのだ。底知れぬ闇の中には、何か明るいものが秘められているのである。

考えてみれば、石炭は燃料なのだ。燃えるのだ。一度火がつけばカッカッと真っ赤になって高熱を発するのである。黒、闇、といっても実はそうした熱くたぎるエネルギーを秘めた黒であり、闇なのである。いわば、胎動を秘めた漆黒、動を予感させる静。そんなイメージを持っているのが石炭なのだといえるだろう。

そう思って、再び『舞姫』の冒頭に目を転じてみよう。

「石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほりはいと静にて、熾熱燈の光の晴れがましきも徒なり。」地味ではありながらも内に力強さを秘め、確かな存在感に満ちた石炭。その後が続くのは、晴れがましくはあっても「徒」な熾熱燈の光だ。前に置かれた石炭に比べると、その熾熱燈の光の白さは、なんとそらぞらしく、そして虚しいことだろう。

もし小説の冒頭に、その小説の冒頭に、その小

説のすべてがあるとしたら、そしてこの『舞姫』の一行に、青年官僚が欧州へと赴き、そこで女をつくって捨てて逃げて、女は発狂した、というストーリーのすべてが込められているとしたら、この冒頭にある石炭と熾熱燈の光は、それぞれが青年官僚たる「余」と女エリスとを象徴していないだろうか。そしてその石炭の力強さ、熾熱燈の光の虚しさを見ると、この冒頭の一行は、「余」の大胆不敵ともいうべき自己肯定宣言と考えてもいいように思える。どれほど晴れがましかりと、女なんて、何ほどでもない。確かなのは石炭だ。余だ。余の力強さ、エネルギーなのだ！

冒頭、いきなり「石炭」で始まるのも、それゆえだろう。「舞姫」というタイトルで、一瞬、宙に遊んだ心が、ここでガツンと一発見舞われる。そうか、これは男の物語か！読者は襟を正して鷗外の語りを拝聴するしかない。『舞姫』などというタイトルをつけておきながら、この作品には、鷗外のそんなふてぶてしいまでの気概、自己中心的なまでのパワーが込められているのではなかろうか。

「銀河鉄道の夜」を読んで

電子制御工学科1年 宇田 彩夏

私が何故この本を読んだかと言うと、別に大して意味などない。強いて言うなら「なんとなく」というのが正しいかもしれない。私は人並に読書をする人間ではあるが、感想文用に推薦された本の中に、以前読んだことのある本などなかった。推薦図書以外からわざわざ探してきて読むのも億劫ねづかに思えた。元々私は「感想文を書くために本を読む」と言う行為がなぜか嫌だった。そんな私が「銀河鉄道の夜」を感想文を書くためだけに読んだ。読み終って思ったのは、ひどく単純なことだった。

「この本を読んで良かった。」

とりあえず、私と「銀河鉄道の夜」を巡り合わせてくれた、夏休みの宿題に感謝しつつ、ちゃんとした感想文を書いてみようと思う。

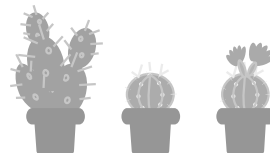
まず、物語は銀河の授業から始まった。別に引きつけられるような出だしで書き始められているわけでもないのに、ジョバンニが自信なさそうに挙げた手を引っこめた辺りで、私はもう物語にとりこまれていた。なんて自分に自信を持ってない主人公なんだろう。私は少々同情にも似た思いを心に抱きながら、物語を読みすすめて行った。読んで行くうちにふと気が付くと、ジョバンニをからかう同級生たちや町の大人たちは、私と同じようにジョバンニを見ていたのかも知れなかった。病気の母の世話をしながら

働く貧しい家のジョバンニ。ジョバンニを卑屈で自信のない少年にしてしまったのは、周りの人間の視線のせいに違いないと私は思った。題名は美しい気がするのに、もしかしてこれは暗く哀しい人間関係の物語ではないのか。そう思いながら読んでいた私の心配は、ジョバンニが星の見える丘に駆け登った瞬間に消し飛んでいた。

そこからジョバンニが友人のカムパネルラと旅していく世界の描写は、ただただ「きれい」の連続だった。前数ページまでのジョバンニの憂うつと、それを読む私の憂うつを拭い去るのに、十分すぎる美しさがいくつもの文章の中にあっただ。たまにもっともらしく意味不明の文章があっても、作者「宮沢賢治」の深い夢想を見ることができるようになって、私はどんどん引きこまれた。花や石や鳥が、ものすごく美しいものとして読むことができる。けれど、その美しさの影にいずれも生気を感じることが、私にはできなかった。唯一明確に心理描写のあるジョバンニだけが、生き物のように思えていた。その主人公の存在が、かえって周りのものの生気のない物悲しい美しさを引き立てていたように思った。

さらに読んでゆくうちに、私はジョバンニの心の変化に気が付いた。どこかで母のことを心配しながら、それよりも全ての人の幸せを願い始めていたのだ。汽車に乗ってから出会った数人との接触でそう思ったとは考え難くて、私はきっとこの汽車の走る世界がジョバンニにそう思わせたに違いないと思った。そうしてジョバンニが全ての人に尽くしてもかまわないと思いつくころに、カムパネルラは消えてしまった。先まわりして言えば現実にカムパネルラは死んでしまっているのだが、カムパネルラはあの汽車に乗って天国へ向かっていたと考えられる。その前にも天国へ行くという三人も汽車に乗っていた。けれどならば何故ジョバンニはあの汽車に乗れたのか。物語の根本にある謎のような気もするのだが、なんとなく私はそれを追求したくなかった。それはただいつものように面倒臭かったからなどではなく、「銀河鉄道の夜」にどうしようもなく魅せられてしまったからだと思う。欠けた数行や数枚を抱えているからこそ、この物語が本当に美しく思えるような気さえ、今の私はしている。

文章自体が、満天の夜空のように美しい本に出会えて、本当に良かった。きっと一生この話は私の中できれいなままに残っていくと思う。



私の好きな本・何回読んでもいい本

—学生図書委員おすすめの本書—

何度でも読める本

機械工学科1年 石橋利恵子

私の何度でも読める本はこれ。「絶対に負けない! とっさの切り返し話術」(中川昌彦著)。会話コミュニケーションをスムーズに運ぶのに欠かせない「話術」。その話術のテクニックのなかで「切り返し話術」がある。これを上手く利用すれば、ありとあらゆるコミュニケーション場面で、人より有利な立場に立つことができる。この本は日常のあらゆる場面ですぐに応用可能な「切り返し話術」のノウハウを網羅している。と、ここまでが表書き。

日常生活で切ったり切り返したりする場面がしょっちゅうある。例えばこんな具体例が載っている。サラリーマンが朝出勤間際にこう言う。

「今日飲み会があるから、五千円ちょうだい。」

すかさず奥さんがこう切り返す。

「アラ、今月の小づかい、もうないの?」

「いや、あれはだな・・・」

鋭い切り返しにアタフタしている姿が目につかぶ。といった、日常的に起こりうる例がいくつも載っている。共感したりそうすればいいのかと納得させられたりするのがおもしろい。サラリーマンではないにしろ、宿題を忘れた生徒が先生にいう言い訳も切り返しだと思ふ。生徒が黙ってしまえばそこまでだが、

「やったんですけど家に忘れました。」

たとえば、実際にやったかどうかはおいて、切り返している。

読んでそのことを実際できるかどうかはその人次第だが知っているのと知らないとはだいぶ違う。二回目読むと一度目に読んだことを思いながら、別の視点で読むことができる。しばらく読んでなくて、久しぶりに読むと、この切り返しは実行できたとか、このときこんな風に切り返せたのかと思ひ、何度読んでも面白いと思ふ。

何回読んでもいい本

電気情報工学科1年 關 さゆり

私の何回読んでもいいなと思う本は、あさのあつこ著「No.6」です。2013年の理想都市「No.6」で、

母親と一緒に何不自由なく暮らしていた少年・紫苑は、12歳の誕生日の夜、「特別警戒地域」という所から逃走してきた少年・自称ネズミを助けたために、人生が変わっていく…といった話です。

この物語は、何よりキャラクター一人一人が魅力的なんです。天然の主人公紫苑、謎めいた少年自称ネズミ、積極的で一途な少女沙布など、見てて飽きさせない人物達ばかり。

そして、そんな彼らが生きるストーリーは、あさのあつこさん独特の引き込まれる文章で、とても素敵に創られています。ぐいぐいとその世界に入っていく、次へ次へと読み進めてしまいます。紫苑とネズミの掛け合いが特に楽しく、話が進んでいくうちに紫苑の切り返しが上手くなっていくのも見物です。

どきどきする場面や、はらはらする展開もあります。それが紫苑の天然さゆえであったり、ネズミの妖しい魅力ゆえであったり、あさのあつこさんのストレートな表現ゆえであったりと様々です。とにかく、一文字一文字に楽しさが詰まっています。見かけたら一度、「No.6」の世界に入ってみるのもいいと思いますよ。

「女子中学生の小さな発見」

物質工学科1年 田原 由樹

“Yさんの実験によると、ゴキブリは制汗スプレーには強いけど、ガラスマイペットには弱いそうです。”

“Nさんはカタツムリのカラを取ったらナメクジになるかを調べようとしましたが、どうしても取れませんでした”

“Oさんは万歩計をつけて寝てみました。朝までに12歩、歩いていました。”

表カバーにこんな事が書いてある。一見すると単なるお笑いネタ。しかし、歴然とした現役中学生の理科に関する研究レポートなのです。しかし、侮ることなかれ、実に奥深い。

本の中で繰り返し上げられるユニークかつデンジャラスな試みを読むうちに、自分たちにもあった幼い頃の妙な着眼、ちっちゃな発見、的外れな推論を思い出して、親近感さえ抱いてしまう。身近な「ハテナ」を解こうと遊び心回路が走るのはなぜでしょう。テレビのリモコンが送る信号は、鐘をおいても反応す

るのか。冷蔵庫でも野菜は大きくなるのか。好きな夢だけ、美味しい夢だけみる方法はあるのか。次々あなたの脳細胞を刺激してくれるそんな一冊。

高専の科学の教科書のおまけとしてみなさんに読んでほしいくらいの本です。ぜひ、ご覧あれ。

※この本は「小さな女子高生の大発見」といえる。

「日本縦断徒歩の旅」を読んで

電気工学科2年 高橋 裕也

僕は旅が好きだ。見知らぬ町や場所に行くとき心が弾むからだ。そこに、どんな人が住んでいて、どんな歴史があって、どんな風が吹くのか…そう思うだけで心がいっぱいになってくる。

この本の著者である石川文洋さんは、一人で北海道から果ては沖縄まで歩き切ったすごい人だ。しかも、65歳という年齢でそれを成し遂げたというから、なおすごい。この本は、その経験をそのまま綴った本だそうで、読んでるとまるで自分が歩いている様な気分になれる。だから、読み終えた後に快い疲労を感じるのだろう。そのせいか、たった1ページ程の厚さの本なのに確かな重みを感じた。

文洋さんの視線には温かさがある。旅先で出会った人の身の上や、町や村の抱えている問題について同じ視線で同情したり一緒に考えたりしている。それらをまとめたコラムが文中に点在し、コンビニや戦争、全国の道路、日本のモラルなどについて実に多くの事を考えさせてくれた。特に、「歩きながら考える平和」では、日本が世界第2位の軍事費大国だということで、驚きと同時に底知れぬ不安を覚えた。

それから、危険な目にもたくさん会ったようだった。天候はもちろん、歩いている隣を走り去る車もそうだ。トンネルは命懸けでくぐり抜けたそうだ。僕にも同じような経験があるから少しは分かる。自転車であったが、歩道のない道のヒヤヒヤ感、トンネルで車と紙一重で通り過ぎる時の恐怖は忘れられるものではない。

でも、そんな中だからこそ、奥さんや旅先で親しくなった人達の支援は、本当にありがたかったんだと思う。文洋さんは「一人」で歩いていたが、決して「独り」で歩いていたわけではなかったのだ。夢の達成の陰には、いつも、支えてくれる仲間がいた。

総日数、150日間に及ぶ旅は、本当はもっといろんなことがあって幕を閉じたんだらう。

でも、僕はそれらを知ることはできない。しかし、僕には僕の道が目の前に広がっているのだから、別の何かを知っていききたい。

「歩いている間は誰にも束縛されない自由時間のように感じる。歩いている時は夢や空想が広がる。だから歩くことが大好きだ。」

文洋さんの言葉だ。僕もいつかこんな旅をしてみたい。

「ショートショート of 広場」星 新一編

電子制御工学科3年 西嶋 沙織

この本は、一般公募された作品を小説家である星新一が選考し、その中の優秀作品が収録されています。ショートショート of 文字通り、収録されている作品のほとんどが10ページ以下と短く、少し時間があるなと思った時に、気軽に手にとって読める話ばかりだと思います。

しかし、作品自体はたった10ページの話を読んだとは思えないほど、その話の内容が充実しているものが、とても多いように感じられました。中にはわずか数行、またはたったの1ページのものまでありますが、しっかりと読ませてくれます。

ショートショートなのでテーマは特になく、SFやファンタジー、日常的、近未来的な話など多種多様な作品を1冊で読むことができるのも、この本の魅力だと思います。そして、テンポ良く読めて、その結末は笑えるものだったり、考えさせられるものだったり、よくはわからないけれど、どこか心に残るものだったり読んでいて飽きさせません。1つの長い作品を読むのとはまた違った、短い作品を多数読む楽しみがあるのではないかと思います。

また、1話あたりのページ数が短い分、収録作品数が多いので「自分は今までこういう作品は興味なかったけれど、読んでみると意外と面白かった。」というような発見もあるかもしれません。

図書館には「ショートショート of 広場」は第3集まで置いてあります。暇つぶしとして手にとったとしても、自然と作品の中に引き込まれている自分ふと気付くのではないのでしょうか。

「源氏物語」について

電子制御工学科4年 広田 麻衣

源氏物語は、平安の昔から現代まで、人々に愛されてきた恋愛物語である。主人公・光源氏と数多くの姫君の恋愛を中心に展開される。国語や歴史などで、名前や内容などを知っている方も多いのではないだろうか。

この物語に登場する女性達はみな個性的だ。代表

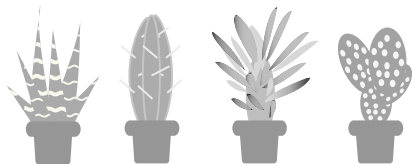
的な女性を挙げると、光源氏の義理の母親（つまり天皇の妻）でありながら、光源氏と一夜の過ちをおかしてしまう藤壺。教養高く趣味深い女性であったのに、嫉妬のあまり生霊になり、源氏の恋愛の邪魔をしてしまう年上の恋人・六条御息所。また、最初の正妻であった気の強い葵の上やおとなしい中流貴族の夕顔は、生霊（六条御息所）の犠牲となってしまふ。更に、光源氏は朱雀帝（光源氏の兄で、天皇となった）の妻、朧月夜とも関係を持つ。「人形のような」と言われた女三宮は光源氏の二人目の正妻だが、浮気して子供ができてしまふ。そして忘れてはならないのが、紫の上である。幼い頃から理想の女性となるように光源氏に育てられた、源氏最愛の君と言われている姫だ。源氏物語の中心人物とも言えるだろう。

このような姫達の恋愛模様は、現代との恋愛の違いや、共通点を探してみるのもいいかもしれない。もちろん、生活の仕方や物の見方が違うため、恋愛のかたちも違うだろう。しかし、浮気相手に嫉妬したり（生き霊になってしまうのはやりすぎだと思うが…）、気をひこうと努力してみたり。私は、案外共感できる場所も多いと思う。

また、源氏物語には男性達による女性論が語られている場面があり、いわゆる「理想の女性像」が描かれている。ここに示される女性像は、おとなしく、ひかえめで、頭が良くてもひげらかさず、嫉妬なくて、美人、などだ。現代に生きる女性側から見れば非難の嵐であると思うのだけれど、さて、男性から見たときはどうだろうか？

このように、1000年も昔に描かれた物語に現代に通ずる感情があるというのは大変面白いと思う。人間はそうたいして変わっていくものではないのだな、という気にすらさせる。源氏物語が愛され続けてきた理由は、案外こんなところにあるのかもしれない。

源氏物語は、大きく3部にわかれ、全54帖からなる。もちろん、古文のまま読むのは長い上に難しい。これから読みたい方や、古文に苦手意識のある方には、気軽に読める漫画や現代語訳の中でもストーリー性を高めて書かれているものをおすすめする。女性視点で語られているものもあるので、好みの本を探してみるのも面白い。おすすめは、講談社より出版されている漫画、「あさきゆめみし」（全13巻）である。まずは、手軽に源氏物語の世界に触れてみてはいかがだろうか。



「魔法使いハウルと火の悪魔」

物質工学科4年 松下 由佳

この話の舞台は、魔法使いや魔法道具が存在するインガリー一國。帽子屋の三人姉妹の長女として産まれたソフィーは、本で読んだ多くの昔話に出てくる三人姉妹の長女がたどる「長女は運試しで一番先に死んでしまふ、出世しない指定席」という運命は、自分にも同様に起こると思ひ込み、自分は地味な帽子屋をついで、地味な人生を送っていくものだと思ひていました。しかし、父が亡くなり、帽子屋見習をしていたソフィーは、ある日「荒地の魔女」に魔法をかけられ、老婆の姿になってしまひます。

18歳の女の子が魔女の呪いで老女に変身してしまふ。このシチュエーションからして、普通のファンタジー物ではありえない斬新な設定です。

そして、この作品はキャラクターが皆とても個性のかつユニークです。ソフィーは、若いうちから自分の人生を生きることをあきらめ、楽しみのない生活を送っています。それが魔法によって実際に老人になったとたん、あきらめを突き抜けて「どうせわたしは」と開き直り、ずばずばと物を言い、やりたいことをやるという素の自分を出し、パワー炸裂。魔法使いのハウルも、ワガママで甘えん坊で自惚れが強く、でもいざと言う時には頼りになり、おしゃれをするために何時間も浴室にこもったり、服装も「派手な青と銀の服」など、とても強い力を持った魔法使いには思えないところが逆に魅力的に思えました。

話の中には不思議の国のアリスや指輪物語、ナルニアなど他のファンタジーが本文中にちらちら顔をだします。ファンタジー大国イギリスから出た本だからこそ、こういう話が書けるなど思いました。

この本は、11月から上映されている「ハウルの動く城」の原作です。しかし、原作と映画ははじめこそ一緒ですが、少しずつ変わっていきます。例えば違いの一つは、ハウルとソフィーの出会いは、ハウルが魔法使いに追われていたからではなく、ハウルがソフィーをナンパしたのが最初の出会い。など、色々違ったところがあります。

映画同様、本の中のいろいろな所に謎がちらばっていて、物語はものすごいスピードで進んで行きます。しかし、最後には謎が解け、映画を見て不思議に思った謎も解けてしまひます。この本は児童文学に分類されていますが、ファンタジー好きの人にはお勧めです。さらに、映画を見て謎を持った人にも楽しんで読むことができると思います。

図書館の思い出

図書委員としての5年間

機械工学科5年 永井 龍一

私は入学した時は委員会に入ろうと思っていませんでした。実はクラスで委員を決める時に、誰もしたがる人がおらず、なりゆきで自分になってしまったのです。その時には小、中学校の図書委員会のイメージから「やることなんてあまりなくて面倒なだけだろうなあ。」と思っていました。

しかし、高専の図書委員会は別でした。図書委員自身が図書館に入れる本を選ぶブックハンティングや図書館報である「図書ぶらり」の作製、文化発表会・高専祭での映画上映など、幅広い活動を行っていました。特に高専祭で行っている映画上映は、ただ映画を上映するだけでなく、皆で企画を出し合ったり準備をしたり…と、とてもやりがいのあるものでした。

また4年の時には委員長になり、委員会の準備など普通より仕事と責任が多く、みんなをまとめ上げ、そして引っ張っていくことの大変さを学びました。

最後に先輩方、後輩のみんな、そして顧問の先生方、5年間図書委員をして本当に良かったと思います、今までありがとうございました。

図書委員の思い出

電子制御工学科5年 長谷部麻耶

私が図書委員の仕事の中で思い出に残っているのは、文化セミナーです。図書委員の仕事は、文化セミナーに参加して講演の内容・様子を記録するというものでした。

文化セミナーは、図書館が企画しており、高専の先生方による講演会です。話の内容は、先生方が研究されてきたものが主であり、地域に密接したものの、新しい技術に関するものなどがありました。また、文化セミナーは多くの地域の方々が参加してくださっています。そのため、講師の先生もわかりやすい説明をされていました。

私は図書委員になってから、初めて参加しました。授業とは違う形で、興味深い話を聞くことができ、面白かったです。

来年度、もしも機会があれば、参加されることをお勧めします。

平成 16 年度

米子高専文化セミナー報告 (第2回～第4回)

平成 16 年度の米子高専文化セミナーは、第2回が6月26日、第3回が10月23日、第4回が11月27日の、いずれも土曜日に、米子市公会堂中ホールにて開催されました。

第2回は、電気情報工学科の青柳敏先生によって、「プログラムとは何?～日曜プログラミングを始めてみませんか～」と題したセミナーが行われ、また、第3回は、一般科目(倫理)の布施圭司先生によって、「日本の宗教事情～日本人は何を信じているのか?～」が行われました。第4回は、建築学科の片木克男先生による「高齢社会の地域

施設立地・生活交通とまちづくり～米子市の現状とこれから～」と題したセミナーが行われ、いずれも多くの方が来場されました。

文化セミナーは、現在、来年度に向けて計画中です。米子高専の「知」を一般の方々にお伝えする重要な催しであると考えています。来年度もぜひぜひ御来場ください!

(米子高専文化セミナーは、今年度からビデオに撮影して、図書館にDVDで保存することになりました。貸出も可能です。)

情報教育部門からのお知らせ

■続・学校向け IT 人材育成研修の実施

前号でもお知らせした通り、鳥取県による「学校向け IT 人材育成研修」が実施されています。前期はデータベースの学習を行いました。後期はネットワーク技術の学習として、以下のコースを実施しています。

- ・基礎コース (e-Learning プレイバック) → コンピュータネットワーク入門 (6時間)
- ・応用コース (e-Learning プレイバック) → コンピュータネットワーク技術 (9時間)
- ・実用コース (e-Learning プレイバック) → TCP/IP インターネットワーキング (9時間)
- ・応用実習コース (集合研修) → C i s c o 認定資格取得研修 (5日間 12/23～27)

最終的には、シスコシステムズ(株)の技術者認定資格である CCNA (Cisco Certified Network Associate) の取得を目指しています。この資格は、情報処理技術者試験に対応させると、基本情報技術者試験に相当するもので、コンピュータネットワーク分野における基本的な知識・技術を有していることを証明するものです。

本校の受講定員は 22 名で、現在 2 年生、4 年生、専攻科生合わせて 18 名が受講しています。受講定員にまだ余裕がありますので、希望者は申し出てください。

来年度もこの研修は鳥取県の事業として実施される予定です。カリキュラムとしては以下の 4 つが予定されています。

- (1) ネットワーク技術
- (2) サーバ管理
- (3) オペレーション／カスタマーサービス
- (4) セキュリティ

特に、「オペレーション／カスタマーサービス」は県内 3 地区に進出してきたコールセンター (西部地区は(株)マックスサポート) で必要となる知識・技能を習得するものです。新卒者採用の重要な要件になると思われます。

何かを成すには投資が必要です。この研修は無料です。お金の投資は必要ありません。時間の投資は必要ですが、必ず自分に返ってきます。学生諸君の積極的な受講を希望します。

■情報処理技術者試験の受験について

春 (4 月) と秋 (10 月) の年 2 回、情報処理技術者試験が実施されていることは、ご存知のことと思います。図書館情報センターでは案内書・願書を取り寄せ、受験希望者に配布するとともに、団体扱いで申し込んでいます。

今年度の受験試験区分とその受験者数、および合格者は以下のとおりです。

春期 (4 月 18 日実施、会場：島根大学)

- ・ソフトウェア開発技術者試験 (2 名) 5D 月谷昌也
- ・基本情報技術者試験 (13 名) 4D 安達 俊、4D 鈴木 廉、4D 野口 傑、5D 澤田春樹
- ・初級システムアドミニストレータ試験 (1 名) 合格者なし

秋期 (10 月 17 日実施、会場：島根大学)

- ・基本情報技術者試験 (19 名) 3D 荒木貴行、3D 佐野健太、3D 佐々木望、3D 田淵 光、4D 廣田麻衣
- ・初級システムアドミニストレータ試験 (3 名) 4D 鈴木 廉、5D 才木直史、5D 佐山 友

実用英語検定や工業英語検定のように単位としては認められませんが、就職活動において資格取得は有利に働きますし、就職後も手当等で優遇する会社もあります。

平成 17 年度春期の試験は、4 月 17 日(日)に行われる予定です。願書の受付期間は 1 月 17 日(月)～2 月 14 日(月)です。願書が届き次第、図書館情報センター内の掲示板でお知らせしますので、受験希望者は申し出てください。

特別寄稿

図書館情報センター設立にあたって

マルチメディア社会への転換という時代状況に対応するため、本年度、米子高専では図書館情報センターが新たに設立されました。そのことに関連して、現代社会における「情報」とは何か?というテーマで、報道の第一線にいる方から原稿をいただくことになりました。ぜひ御覧ください。



記者の仕事ってなあに? ~台風 23 号の取材から~

読売新聞京都総局記者 井 口 馨

学生のみなさんは台風 23 号を覚えていますか? 昨年 10 月 20 日から翌 21 日にかけて襲来し、兵庫県豊岡市や京都府北部で大きな被害をもたらしました。台風による死者は、西日本を中心に 18 府県で 68 人、行方不明者は 8 府県で 20 人にのぼっています。鳥取県内でも、鳥取市でビル屋上から転落して男性 1 人が死亡したほか、湯梨浜町や福部村で 20 世紀ナシが相次いで落果するなど、農業に与えた影響も深刻です。私は、台風襲来の翌日から約 1 か月、取材班の一員として、京都府北部の被災地を歩きました。市街地も田園地帯も一面泥だらけの惨状を目の当たりし、「とにかく伝えなければ。」と被災地の現状やボランティアらの支援など復興への動きを取材しました。

私は台風襲来の当夜、京都総局(京都市)で警戒していました。「宮津市内が冠水し、土砂崩れで二人が生き埋めになったようだ。」「舞鶴市の由良川がはんらんし、国道で立ち往生したバスの屋根の上に乗客ら 37 人が取り残されている。」にわかに信じられないような情報が総局に次々と舞い込む中、取材班の車で現地に急行しましたが、至る所で路面の陥没や倒木が相次いで通れず、舞鶴市に到着したときには、空が明るくなっていました。

幸いにもバスの乗客は、腰まで水につかりながらも、自衛隊のヘリコプターなどで全員無事救助されました。しかし、周囲の集落では住居が床上浸水。畳や家財道具まで泥で埋まってしまい、お年寄りらが途方に暮れて立ちつくしていました。山あいの谷川も土石流となって集落にだれだれ込み、どこが道か田畑かも見分けられないほど土砂が覆っています。

私自身も泥だらけになって取材を続けました。立ち直ろうと黙々とシャベルで土砂を戸外にかき出し、多量の水を吸って重くなった畳を干す住民らの姿をたくましく思い、全国から集まるボランティアの支援活動に勇気づけられましたが、一方で「こんな大惨事になる前にもっと行政が動くことはできなかったのだろうか?」と疑問がわいてきました。

調べてみると、土砂崩れで 5 人が亡くなった舞鶴と宮津市では、土砂崩れが起きる 1 時間半前に京都府の土砂災害監視システムが崩落の可能性を指摘していたのに住民には伝わっていなかったことが分かりました。情報を提供する側の府と各自治体との間の連携がうまくいってなかったことが原因ですが、「避難指示や避難勧告が

早期に出されていれば、守れる命もあったかもしれない。」と考えると、がく然としました。行政が避難場所に指定する公民館が床上浸水している集落もあり、「昔から住民が洪水に慣れている地域だから大丈夫と思った。」という、ある消防幹部の釈明には返す言葉も見つかりませんでした。

突然の災害に襲われた被災者から取材するのはつらいことですが、「川に近い公民館に避難するなんて誰も考えていない。」「土砂崩れの危険があることすら知らなかった。」など現場の生の声を聞くことが、重要な取材のヒントになります。大手川がはんらんし、市内の中心部が冠水した宮津市では〈ゴミの山〉が出現していました。ゴミが自治体の処理能力を超えてしまい、ぬれて使えなくなった冷蔵庫や布団などが、川沿いに高さ約 2 メートル、長さ約 300 メートルにわたって並べられ、異臭を放ちました。住民を悩ますゴミの問題も、被災地を実際に歩いてみて分かったことです。台風は今後も必ず日本にやってきます。次の台風被害を防ぐためにも住民の不満や嘆き、要望に耳を傾けて問題点を洗い出し、記事にすることが、行政に危機管理の見直しを求めていくことにもつながります。

「何度も現場に足を運んで歩きなさい!」とは、先輩から口が酸っぱくなるほど繰り返して教えられる新聞記者の基本です。人からの伝聞をそのまま信用したり、資料に頼るのではなく、実際に自分の目で見ることで、正しいことや必要なこと、求められていることを判断しなさいという意味で、これは新聞記者に限らず大切なことだと思います。事件などの際に、被害者や周辺への過剰な取材が、メディアスクラムとして社会問題になることもあり、もちろん一定の節度も求められているのも事実ですが、みなさんの場合はどんどん興味のある場所へ出て活動して、いろいろな体験をしてほしいと思います。実際、台風 23 号の支援ボランティアでは多くの若者が汗を流していました。みなさんの活躍を期待しています。

著者プロフィール

- 2001年4月 読売新聞大阪本社入社。鳥取支局配属
- 2002年9月 鳥取支局倉吉通信部に異動。
(鳥取時代は警察や行政取材に携わる)
- 2004年9月 京都総局に異動し、警察担当。